

平成29年度「とちぎっ子学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立 上河内 中学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには、学校の状況や生徒の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があります。その上で、家庭や地域と一体となって生徒を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから、平成29年度「とちぎっ子学習状況調査」における本校生徒の学力や学習状況の概要について、以下のとおり公表します。

また、調査結果は、学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので、調査結果の分析、指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1 目的

本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

2 調査期日

平成29年4月18日(火)

3 調査対象

小学校 第4学年、第5学年(国語、算数、理科、質問紙)

中学校 第2学年(国語、社会、数学、理科、英語、質問紙)

4 本校の実施状況

第2学年	国語	68人	社会	68人	数学	68人
	理科	68人	英語	68人		

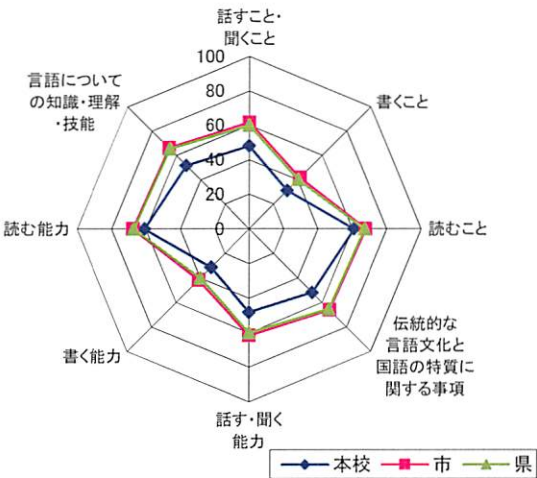
5 留意事項

- (1) 本調査は、対象となる学年、実施教科が限られていることや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから、本調査の結果については、生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であることに留意することが必要となる。
- (2) 本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区別の平均正答率などを公表した。
- (3) 平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため、「本年度の状況」、
「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立上河内中学校 第2学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	話すこと・聞くこと	48.0	61.6	59.9
	書くこと	31.3	41.7	40.1
	読むこと	60.8	67.6	67.0
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	51.8	66.1	65.4
観点	話す・聞く能力	48.0	61.6	59.9
	書く能力	31.3	41.7	40.1
	読む能力	60.8	67.6	67.0
	言語についての知識・理解・技能	51.8	66.1	65.4



★指導の工夫と改善

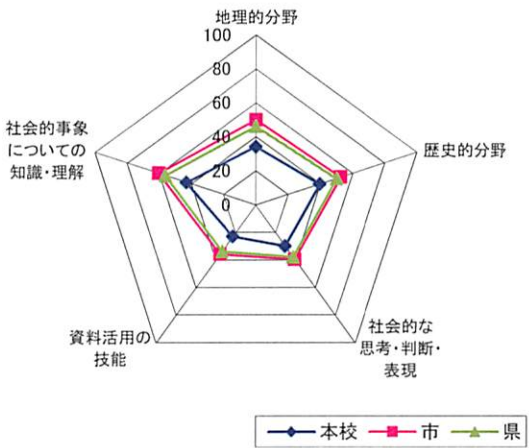
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
話すこと・聞くこと	●正答率は市と比べ13.6ポイント低い。「必要に応じて質問しながら話を聞き取る」問題では、正答率が県や市と比べて、20ポイント以上と著しく低い。	・日常的な会話の中でも、人の話を聞き、必要に応じて適切な質問をするという、基本的な言語活動をさせていく。更に自分の考えを整理し、相手に伝えるという活動を授業で意識的に取り入れていく。
書くこと	●正答率は市と比べ10.4ポイント低い。「カードを基に考えの根拠を明確にして鑑賞文を書く」「カードを整理し文章の構成を考えて鑑賞文を書く」の問題の正答率は市とは13.1ポイント低い。	・「書く」ことにはかなりの抵抗があるので、自分の思ったことや発した言葉を文章化するという学習を多く取り入れていく。またよく書けた友達の文章を参考にさせることで、意欲を喚起させていく。
読むこと	●正答率は市と比べ6.8ポイント低い。「語句が示す内容を捉える」「要約・要旨を捉える」問題の正答率が特に低かった。 ○「文学の表現の特徴を捉える」問題では、市と比べ1.5ポイント高く、無解答率も0.9ポイント下回っている。	・文章の構成や展開を捉えたり、接続語やキーワードなどに注意させながら、文章全体の要旨を捉えさせたりする学習を取り入れていく。 ・登場人物の様子や情景描写を捉える指導を、今後も継続していく。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	●正答率は市と比べ14.3ポイント低い。漢字の読み書きは著しく低い。更に歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題では、正答率は市と比べ36.5ポイント低く、無解答率も25.7ポイントと上回っている。	・漢字の読み書きは、反復練習を行い定着を図る。 ・古典は、苦手意識を取り除けるよう、資料を用いて基礎知識を解説し古典の世界がイメージしやすいようにさせる必要がある。仮名遣いは漢字同様、反復練習を行い定着を図る。

宇都宮市立上河内中学校 第2学年【社会】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	地理的分野	34.2	50.0	46.2
	歴史的分野	39.7	52.6	50.2
	社会的な思考・判断・表現	29.7	39.4	37.6
	資料活用技能	22.9	35.9	33.8
	社会的な事象についての知識・理解	43.2	60.4	56.3



★指導の工夫と改善

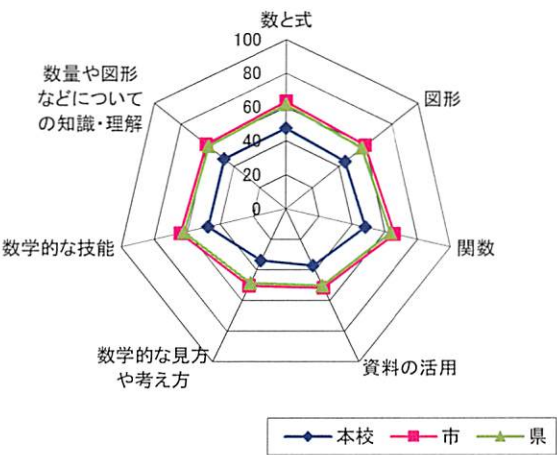
○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

分類・区分	平成29年4月18日（火）	今後の指導の重点
地理的分野	●正答率は、市とは15.8、県とは12.0ポイント低い数値であった。内容ごとに見てみると、「世界の地域構成」では市18.8、県15.4、「世界各地の人々の生活と環境」では、市17.9、県13.7、「世界の諸地域（アジア）」では、市14.8、県10.9、「世界の諸地域（オセアニア）」では、市11.9、県8.1ポイント下回っている。 設問ごとに見ると、「適切な地図を選択し、示された地点の方位が分かる。」が市28.8、県24.7、「アジア州に位置する山脈の名称が分かる。」が市25.8、県21.2と著しく低かった。 「東南アジア諸国の輸出品が変化した場合を考察する」では市3.4、県2.4と差があまりなかった。	・教科書の重要語句やワークブック、資料集を利用し、知識の定着を図り、基礎的・基本的な事項をしっかりと覚えさせる。 ・小学校第5学年で学習する「自然条件から見て特色ある地域」や「おもな大陸と海洋の学習」「我が国の国土の環境と国民生活との関連」についての学習を想起させながら、小学校で学習した内容と関連付けることで、既存の知識を生かせるよう工夫した授業展開を図る。 ・「東南アジア諸国との輸出品が変化した場合を考察する」の設問では、マイナスポイントではあったが、他の設問よりも良好な解答が得られた。実際の生活に浸透しているアジア製品に対する関心が高いことが分かる。自分たちとの生活とも関連させて思考させることで理解を高めていくようにする。
歴史的分野	●正答率は、市とは12.9、県とは10.5ポイント低い数値であった。 内容ごとに見ると、「歴史のとらえ方」では市20.8、県とも19.3、「縄文時代～古墳時代」が市13.0、県10.4、「飛鳥時代～平安時代」が市18.8、県15.5、「鎌倉時代～室町時代」が市3.4、県1.2ポイント下回っている。 設問ごとに見ると、「年代の表し方が分かる」が市25.6、県25.5、「律令制における朝廷から派遣された役人の名称が分かる」が市28.1、県21.1と著しく低かった。 ○設問の「資料から中世までの生活の様子を正しく判断する」は市4.6、県4.5と市、県平均を唯一上回った。	・歴史的分野においても教科書の重要語句やワークブック、資料集を利用し、知識の定着を図り、基礎的・基本的な事項をしっかりと覚えさせる。 ・小学校で学習した歴史上の人物やできごとを想起させながら、年代の表し方や時代区分の仕方など歴史を学習していく上での決まり事をしっかりと理解させ、時代の大きな流れに気付かせる。 ・小学校第6学年で学習した「武士の政治の始まりと源平合戦」～「室町文化と現在とのつながり」の内容の定着が資料から中世までの生活の様子を正しく判断する」の設問で、市・県の平均を上回る結果を出したと思われる。小学校での学習内容を生かして中学校で学習する新たな内容に興味関心を持ち、学習に取り組めるようにする。

宇都宮市立上河内中学校 第2学年【数学】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と式	47.5	63.3	61.5
	図形	44.7	59.8	57.4
	関数	48.2	65.9	63.4
	資料の活用	37.1	51.7	50.1
観点	数学的な見方や考え方	33.8	50.4	48.5
	数学的な技能	47.3	64.1	61.9
	数量や図形などについての知識・理解	47.1	60.6	58.9



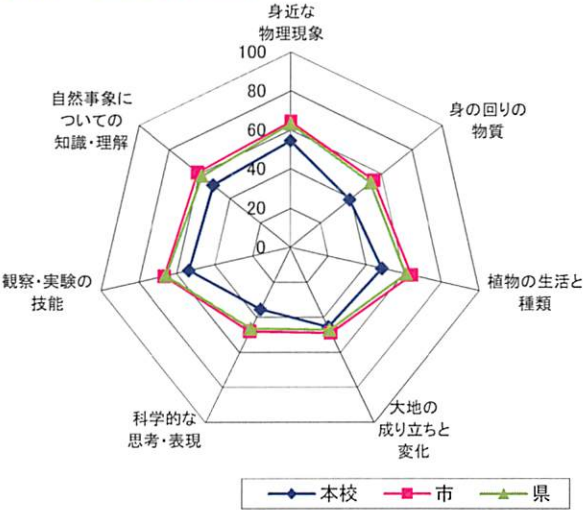
★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と式	●「四則混合の正負の数の計算」や「8枚のカードを留めるために必要なピンの個数を求める」の問題が県や市と比べ20%以上低い。どちらの問題も、得点層の上位と下位の差が非常に大きい。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの ・四則計算では、計算方法が身に付いていないため、解けないことが考えられる。授業の中で復習の時間を設け、机間指導の際に計算過程を確認することで、計算方法の定着を図っていく。 ・習熟度別学習をより効果的に活用し、上位層と下位層の差を小さくできるよう指導にあたる。
図形	●他の領域と比べ苦手意識が少ない領域のように考えられる。しかし、「おうぎ形の面積を求める問題」、「ねじれの位置にある辺を選ぶ問題」について県や市と比べ正答率が低く改善をしなければならない。また、角柱や角錐の体積の関係を理解していない状況にある。	・おうぎ形の面積やねじれの位置の辺を求める問題、角柱や角錐の体積を求める問題について、2年生の図形単元の導入時に必ず復習して定着をさせる。 ・図形の単元は、数学が苦手な生徒の中でも比較的取り組みやすい単元なため、この単元で生徒の関心・意欲を高められるよう指導する。
関数	●「与えられた座標を点に記入する」問題は73.5%と比較的正答率が高いが、県や市と比べて低く80%は達成したい。グラフから式に表したり、表から式に表したりする問題の正答率が低く、苦手意識がある。 また、他の領域に比べ無回答率が高い問題が多くみられた。	・関数において重要な表・式・グラフの関連性をしっかりと理解させ、指導にあたる。2年生で1次関数を学習する前に1年次の比例・反比例の復習を必ず行い、それぞれの関数の一般の形をしっかりと身に付けさせる。 ・無回答のパーセントが多いため、自分の考えを表現したり、説明する機会や考えを話し合う場を多く授業で設けていく。
資料の活用	●「度数分布表から、指定された順番の生徒の階級を求める」では、県や市と比べ25%近く正答率が低かった。また、ヒストグラムから中央値を含む階級を求める、相対度数を求めるなど基礎的な問題の正答率が25%を下回るなど、定着されていない状況にあることが分かる。	・資料の活用における階級値、相対度数、最頻値、中央値などの用語の復習を確率の単元前に授業で取り入れ、基礎基本の定着を図っていく。 ・また、2年時では確率の単元があるため、実際にさいころを転がすなど、実生活に基づいた事象を取り入れながら授業を進めることで、生徒の関心・意欲を高める。

宇都宮市立上河内中学校 第2学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	身近な物理現象	54.4	64.3	63.2
	身の回りの物質	39.1	54.8	52.8
	植物の生活と種類	48.5	64.0	61.1
	大地の成り立ちと変化	45.4	48.8	47.0
観点	科学的な思考・表現	35.4	48.0	46.4
	観察・実験の技能	53.4	66.4	65.6
	自然現象についての知識・理解	50.9	61.1	58.3



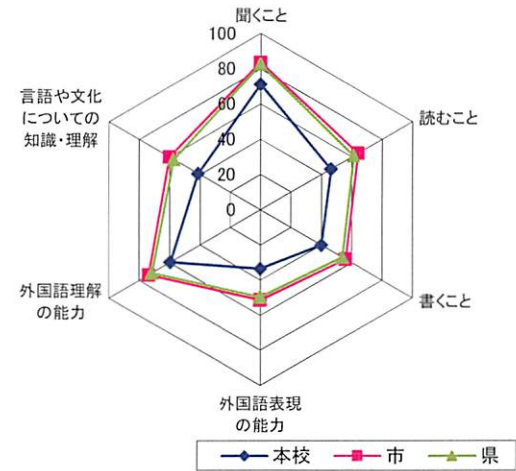
★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
身近な物理現象	●水溶液の濃度の求め方や、光の進み方について、市や県の正答率と比べると20ポイント以上下回っている。また、記述式では、県や市と比べると5ポイント無回答率が上回っている。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの ・音の大小・高低で、振幅や振動するとの関係や光の進み方について視覚的教材を使用して理解させる。また、実験結果を予想、発表させる時間を確保し、基礎基本的な知識をさらに深めていく。
身の回りの物質	○状態変化によつての質量の変化に関しては、県と比べると3ポイント、市では0.7ポイント上回っている。 ●物質の変化によって温度変化を推測させる内容や物質の粒子について推測させる内容については、県や市の正答率と比べると20ポイント以上下回っている。また、体積を正しく測る理由を説明させる記述式に関しても20ポイント以上下回っている。	・説明や推測させる問題について無回答率が多いので、授業の中で、考えさせ、書かせる内容を多く取り入れ基礎基本的な知識をさらに深めていく。
植物の生活と種類	●蒸散の実験で水面に油をたらす理由や、水の減少量と気孔の数などの説明する記述式に関して、県や市と比べると10ポイント以上正答率が下回っており、無回答率も多い。	・実験での注意点や比較する実験などの説明する内容が不十分なので、自らノートに書かせたり、発表させる機会を多く取り入れ基礎基本的な知識をさらに深めていく。
大地の成り立ちと変化	○鉱物の種類や初期微動の次に起こるゆれに関しては、県や市と比べると5ポイント以上正答率が上回っている。 ●堆積岩の特徴や観察結果などから火山の形を推測する内容は、県や市と比べると10ポイント以上下回っている。また、無回答率も5ポイント以上上回っている。	・観察の結果や表を参考に答えを導き出す内容を授業で多く取り入れ、ノートに自分の考え書かせる学習活動を取り入れ、基礎基本的な知識をさらに深めていく。

宇都宮市立上河内中学校 第2学年【英語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	聞くこと	71.2	83.6	82.6
	読むこと	46.3	64.2	61.2
	書くこと	40.0	56.2	53.8
観点	外国語表現の能力	33.5	51.2	49.4
	外国語理解の能力	59.5	73.7	71.5
	言語や文化についての知識・理解	41.2	60.1	57.3



★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
聞くこと	●正答率は市と比べ12.4ポイント低い。疑問文の聞き取り、また、まとまりのある英語の聞き取りでは正答率が県や市と比べて20ポイント以上低い。疑問詞を含む疑問文に回答したり、誰が・いつ・どこで・何をした、を聞き取ることが苦手である。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの ・授業の中で英語によるやりとりを増やし、疑問詞を含む疑問文を多く取り入れた質問に対する基本的なルールを定着させる。 ・教科書の他にも副教材のリスニング問題を活用し、場所や時を表す語句を正確に聞き取ることができるよう、繰り返し聞かせる。
読むこと	●正答率は市と比べ17.9ポイント低い。特に長文の読み取りでは正答率が著しく低く、30%台であった。基礎的な語彙力不足のほか、指示語や大意の把握や問われている部分を全体の中から見つけ出すといった読み取りの力が身に付いていないためと考えられる。	・単語や基本文の知識の定着を図り、まとまった文の読み取りに数多く触れさせ、長文を読むことに対して抵抗をなくしていく。 ・文の大意を把握する力や要約する力を身に付けるために、文全体の大まかな把握をする質問や内容の正誤を問う問題などを多く取り入れる。 ・英文を読む際には、毎回指示語が何を指しているのか確認を行う。また、質問に対する文に線を引きながら読ませ、長文を読む際のポイントを身に付けさせる。
書くこと	●3領域の中で正答率が一番低く、市と比べ16.2ポイント低い。特に場面や条件に応じた英作文や、一般動詞の過去の否定文・疑問詞を用いた疑問文の語順を問う問題ではどの設問も40%を下回っている。基礎的な語彙や文法の定着が図れていない。	・英作文を書くには、基本的な単語・熟語や文法の知識理解が必要となる。家庭学習の課題として単語や基本文の練習に取り組みせ、小テストを増やして書く力を強化していく。 ・内容につながりのある英文を書くために、言語材料の使い方やつなぎ言葉を意識した文を書く指導を行っていく。

宇都宮市立上河内中学校 第2学年 生徒質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

○No.108、107、110、111の学習方略の質問に関して、市・県を上回る肯定的な回答が得られた。教科の好き嫌いに関する質問No.88～98、100～70に関しても市・県平均を10ポイント近く上回る肯定的な回答がみられた。20ポイント以上上回る教科もあった。各教科におもしろさ、楽しさを感じながら学習に取り組んでいることがうかがえる。今後も各教科が好きという気持ちを生かしながら授業実践を行う。

●○学びに向かう力の中の自己責任は、市・県より5.0ポイント低い。また学びを律する力、学習継続力は市・県より5.0ポイント低い。No.2の「家で宿題をしている。」の回答が市・県より12.3ポイント低いことから家庭学習に取り組めていない。それゆえにNo.50の「自分はよく勉強ができるほうだと思う」の回答も11.3ポイント低くなり、No.37「先生は学習のことについてほめてくれる。」も8.9ポイント低い回答になっていると思われる。

No.62「家の人と将来のことについて話すことがある。」は8.1ポイント、No.66「家の人と学習について話をしている。」は6.3ポイント市・県の平均を上回った肯定的な回答が見られた。これらの事柄から、保護者に学校での学習の様子をどんどん発信し、保護者と連携して家庭学習に日々継続して取り組めるようにし、学びを律する力や学習継続力を付けさせていきたい。そうすれば学びに向かう自己責任の力も向上すると思われる。

●対話力、共生力、規律力に比べて、学級力の中の支えあう力が5.3ポイントと大幅に低くなっている。学校生活での様子を見ると、学習において教え合う活動がうまくできていなく、生徒同士の係わり方にも問題がある。今後、グループ活動や話し合い活動等を通して一人一人の良さを認め合うことを意識的に学習活動に取り入れることで、良い人間関係づくりに取り組んでいくことで支えあう力を高める。

学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
・表現力を高め、自分の考えを伝え、学び合うことのできる生徒を育成する。	話し合い活動や、グループ活動、発表の機会を意識的に授業中の必要な場面に応じて取り入れる。	No.26「授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている」で肯定的な回答が市を2.7ポイント上回った。

★学校全体で、今後新たに重点を置いて取り組むこと

調査結果等に見られた課題	重点的な取組	取組の具体的な内容
・基礎的・基本的内容の定着がされていない。	・基礎的・基本的内容の定着を図る。特に授業の導入時や振り返りで、問題集やミニテスト等を行うことで定着を図る。	・小学校からのつまづきを小中一貫教科部会で把握し小中9年間を見通した指導を行う。 ・達成目標を小さく設定し、確実に達成できるようにする。 ・各教科で確実に定着させる内容ではドリル学習を根気強く行う。 ・保護者への今まで以上の啓発活動を保護者会、三者懇談や日常の接する機会を通してする。